

# 北 ぞらくろあ

第50号 2020年5月1日（毎月1日発行）

ふるさとの巡礼地を訪ねて（番外編）

## 旧恵蘇郡三十三か所霊場

先月号で「旧三上郡三十三

か所霊場」の現状レポートは 三上郡の北西に位置する恵  
終了したが、旧三上郡の近隣 蘇郡は、合併する前の旧庄原  
にも三十三か所霊場はちゃん 市の北西部と、口和町、比和町、  
と整備されていた。番外編と 高野町を含む地域である。旧  
して、そのいくつかを紹介す 恵蘇郡三十三か所霊場の第一



円通寺は備後西国三十三か所霊場の18番札所でもある。

番札所は、本郷町にある円通寺。臨濟宗妙心寺派慈高山円通寺は、甲山城主・山内首藤氏の菩提寺である。

甲山には築城以前から円通寺の前身である観音堂があったといわれ、山内通資が正中元年（一三二四）京都嵯峨天龍寺の玉洲を招いて開山し、氏寺としたと伝えられる。その後、荒廃したが、山内直通が天文年間（一五三二〜一五五）に中興、現在の本堂もこのとき建てられたものと思われる。禅宗様建築の正當なる形式で、本堂に祀られている厨子とともに、国の重要文化財に指定されている。

本尊は千手観音菩薩で、観音信仰とは深いつながりがある。円通寺は、備後西国三十三か所霊場の十八番札所でもある。その御詠歌の額面が、本堂の天井に描かれた龍の絵のそばに掲げられている。その龍には、有名な伝説があるのだが、その話はのちほど紹介する。  
さて、旧恵蘇郡三十三か所霊場の第一番札所としての御詠歌は、

二世をしもかくる誓ひの円通寺打そはじむる補陀樂のみち

補陀樂は補陀落か。観音菩薩が降臨する伝説の山だと言われている。さあ、これから霊場巡り（信仰）の道を進んで行くぞという決意を詠ったものか。

残念ながら、この御詠歌の額面を見つけることはできなかった。和田大城住職に確認すると、旧恵蘇郡三十三か所霊場のことも初耳だという。もちろん、記録も残っていない。円通寺は、明治に入ってからしばらく無住寺だった期間があるそうで、そのときに伝承が途絶えてしまったのかもしれない。廃仏毀釈の猛威は、山深い寺院にも傷跡を残している……。

円通寺に至る山の参道沿いには、多くの石仏が安置されている。本尊である千手観音の石仏が多いが、背後の無数の手がまるで羽根のように見えて、天使の姿を想像してしまった。

うん？ よく見ると番号が刻まれている。ご住職に確認すると、途中の番号が抜けているが、三十三番まで石仏があるのだそう。円通寺の周辺だけで霊場巡りができるようにしていたのだろうか。

よく晴れた日で、沿道に生えているミツバツツジの淡紫

色の花が満開だった。

以下、旧恵蘇郡三十三か所霊場の札所の名前と所在地だけ列挙しておく。郷土史家の増原卓三氏が、「比和と自然の歴史」第十集（比和町郷土史研究会編、昭和五十二年刊）に、「備後恵蘇郡観音三十三番」として発表したものからの転載である

そのときの増原氏の「まえがき」に、「これは比和町三河内光島家所蔵のものを、同所慶雲寺松永清高師を通じて借覧し筆写したものである。巻頭には比和村正福寺常什物とあり、同寺六世大乘千栄師が明治初期に、需めに応じて佐々氏に授与したとある。」と書かれている。



- 1 番：円通寺（本郷町）
- 2 番：永明寺（上原町）
- 3 番：正法寺（殿垣内町）
- 4 番：常円庵（七塚町）
- 5 番：長樂寺（木戸町）
- 6 番：観音寺（木戸町）
- 7 番：宝住院（平和町）
- 8 番：長徳寺（口和町永田）



- 9 番：松岳院（口和町大月）
- 10 番：海雲寺（口和町宮内）
- 11 番：法林寺（口和町湯木）
- 12 番：瑞泉寺（門田町）
- 13 番：三教寺（川北町）
- 14 番：観音寺（川北町秋国）
- 15 番：安楽寺（比和町木屋原）
- 16 番：慈眼寺（比和町木屋原）
- 17 番：慶雲寺（比和町三河内）
- 18 番：観音寺（比和町三河内）
- 19 番：正福寺（比和町比和）
- 20 番：梅香庵（比和町比和）
- 21 番：城福寺（比和町永原）
- 22 番：永昌寺（比和町森脇）
- 23 番：東明寺（高野町湯川）
- 24 番：正音寺（高野町上市）
- 25 番：長福寺（高野町新市）
- 26 番：敬林庵（高野町和南原）



- 27 番：万蔵寺（高野町和南原）
- 28 番：慈眼寺（高野町和南原）
- 29 番：深石堂（高野町和南原）
- 30 番：求善寺（高野町）
- 31 番：明福寺（高野町中門田）
- 32 番：実相寺（高野町南）
- 33 番：功德寺（高野町）

## 円通寺天井の龍

円通寺本堂の天井は唐様建築の様式である平天井、その天井には龍の絵が描かれている。作者は画僧・雪舟と伝承され、「芸藩通志」にも「堂の天井雪舟の絵あり是又直通の寄附なり」と記している。

この龍の絵には一つの伝説がある。この龍を描き終えた雪舟は石見に向

け旅立ったが、その夜から麓の村里へ龍が水を呑みに現れて里人を恐れさせた。たまりかねた住職が、雪舟が帰るのを待ってその由を知らせると、肯いた雪舟は直ちに一本の釘を龍の眼に打ち込んだ。するとその夜から、龍が麓の村に現れることはなくなったという。

ちなみに、昭和四十五年（四十七年に本堂が解体修理されたとき、天井も下に降ろされた。そのとき龍の眼をつぶさに観察したそうだが、一本の釘も打たれてはいなかったことが確認されている。  
（「庄原市の文化財解説」参照）

どらくろあ  
ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

# 青木筈子『築地人形』

## ——倉田百三へ、愛から思慕へ

郷里の庄原が生んだ文豪倉田百三と最初に結ばれた高山晴子。恋多き百三を、晴子の側から描いた青木筈子（しょうこ）『築地人形』（河出書

房新社）がこの3月に上梓されました。おびただしい資料や手紙類を駆使して、百三の「愛」の質について浮き彫りにしています。倉田百三の「愛」についての集大成となる作品だと、私には思えます。

私が特に知りたかったのは、1つは「出家とその弟子」と庄原のかかわり。2つ目は、献身の人、晴子と結婚して2ヶ月で離縁したいきさつです。

「出家とその弟子」の誕生については、「庄原の（自宅の）離れ座敷で一幕だけ書いて」、広島市郊外の「丹那」で続きを書き継いだと、簡潔に結論づけています。晴子がせつせと浄書しています。

晴子と百三の関係は——百三が、大正3年に一高を退学し、庄原の上野池畔で過ごした夏の終わりに痔瘻（じろう）を傷め9月、広島病院に入院します。そこで教会から派遣

された看護婦が晴子です。晴子は、百三に強く惹かれ、大恋愛状態になります。

なり生活が一変します。大正9年7月、百三は晴子を入籍し、2ヶ月後に離縁したのです。百三は、「恋よりももっと高い愛を生み出さなくてはならないと思う」と晴子を説得するのです。実際は、弟子入りしてきた令嬢、

### また読んでみたい本・番外編

——青年たちに

音谷 健郎



【表紙カバー】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

今回は、青木筈子の『築地人形』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

やがて両家の公認のもと同棲し、大正6年にひとり息子の地三を産みます。百三は、友人に晴子について「美しくないのは辛抱して、私の一生の伴侶にしてやらうと思ひます」と書き送っています。同年刊行の戯曲「出家とその弟子」が大ベストセラーに

伊吹山直子との関係ができていたのです。百三が晴子を入籍したのは、地三を庶子にしたくなかったからと、作者は見えています。晴子は、百三と別れた後も印税収入をあてがわれ、余裕のある暮らしをしますが、気持ちは穏やかではあ

りません。というのはいずれ、東京・大森の百三の新居の周りに、百三が一高生のとき熱烈な恋愛し、成就しなかった逸見久子と、資産家の令嬢、伊吹山直子が住んでいたのです。しかもそれぞれとの面会時間が決められていました。「久子 日曜日午前八時半より午後四時まで ▽晴子 水曜日同 ▽直子 金曜日同」晴子は、「三人の女性が倉田に会う日をきめられるような生活のみにくさを、私はいやだと思ひ、また倉田の理想とする境地に私が達するには、尼のようにならねばと、念仏ざんまいの生活にはいつたこともありません」と言うのです。百三にとっては、広い愛のかたちであっても、当時の社会は黙っていません。大正11年、スキヤンダルとして報じられ、人気が落ちました。本の後半は、晴子が俳優薄田研二と結ばれた後、新劇の世界で「築地人形」を作って暮らす姿が描かれます。ただ、晴子は生涯、「百三さんは私を育ててくれた人には違いありません」と言い続けました。この本では、郷里の側の資料だけでは見えなかった百三像が立ち現れ、強い感動を覚ええました。

## 「草花の博物誌」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動物学などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

### ヒトリシズカ 舞の名手の佳人を連想させる花

若葉がもえる雑木林の中にヒトリシズカの花をみつけたとき、春も盛り、その先に白いかわいらしい花をりにきているな—と思います。四枚つけています。そして、その白さは林の中にあつて、一際美しく見えます。



花が一本の茎先にひっそりとかたまつてついているので、一人静かに春の盛りを楽しんでいるのかな、その姿からヒトリシズカと名づけられたのかなと思われがちなのですが、そうではありません。静(しずか)

というのは源義経の恋人、静御前の名前によるものです。義経の恋人、静御前は舞(まい)の名手でした。そして、その舞はとても気品があつて、その上、清らかな美しさが漂っていたので、舞を一目見た人は誰でも心を打たれたそうです。

ヒトリシズカの花がまるで静御前の舞う姿のように気品があつて、清らかな美しさを人びとに感じさせているところからシズカという名前がつけられたようです。そして、ヒトリというのは花をつけた茎が一本だけ伸びているところから名づけられたようです。

### カザグルマ 手作りの風車を競った子どもの思い出

色紙のかどとかどを重ねて折り、折り目にそってまん中へ向つて四つのかどからハサミを入れていきます。色紙を四枚に切り離さないように

二本だったらフタリシズカ? そうですね。フタリシズカはヒトリシズカより少し草丈が高く、花穂を二、四本出しています。ときにはヒトリシズカも花穂を二本出すことがありますから気を付けましょう。そのときは花が大きく、四枚の葉が並んでいるかどうか確かめましょう。フタリシズカは花が小さく、葉は二枚ずつ、向かいあつてついていますから区別は簡単です。

ヒトリシズカの花も散り、フタリシズカの花も散ると、若葉は青葉へ変わり、林は初夏を迎えます。

しまししょう。まん中を残してハサミを入れ終ると、ひとつずつ三角にとがっている端を中心へ向けて折り曲げ、四つの端を順番に重ねていきま



しよう。そして、針を一通してプロペラのような形に仕上げたら、割り箸にさしこみましょう。

これで風車のできあがり、風車を前へ向けて走ってみましょう。風車は風を受けていきおいよくまわってくれます。もし、まわらないときは、はねと割り箸の間になまの大豆を入れて軸受けにしてください。そうすると、うまくまわってくれます。

夏になると、お店や緑日の夜店でセルロイドで作られた色とりどりの

美しい風車が子どものおもちゃとして売られていましたが、むかしの子どもたちは自分で色紙を使って風車を作り、誰の作った風車が一番よくまわるか競いあって、広場を走りまわり遊んでいました。

子どもたちが風車で遊ぶ頃、カザグルマは大きな花を開きます。風車の軸に似た長い花軸をもって走り出すと、花びらがプロペラになって、今にもまわり出しそうです。カザグルマの名前の由来はもうとっくにわかりましたね。そうです、

むかしの子どもたちのおもちゃ「風車」に花を見立てて名づけられたものです。

かつて湿り気のある野原や川岸などで多く見られたカザグルマの花もどうしたことか消えていき、風車の遊びも子どもたちの中から消えてしまいました。そして、花屋さんの店先にはカザグルマの咲く頃、中国原産のテッセンを改良して作られた「クレマチス」のさまざまな品種が並べられるようになりました。

(写真はいずれも小川光昭氏撮影)

## 老いの雑記帳 ②7

### 滂沱の涙

滂沱(ぼうた)の涙とは「涙のとめどもなく流れ出るさま」を云う。人間には「喜怒哀楽」という感情があるから、いろいろな場面で涙を流す。嬉し涙、激怒の涙、悲しみの涙、快樂絶頂の涙、等々、ひと口に涙と云っても種類は様々だ。

滂沱の涙は悲しみの極致での涙だ。この涙を流すのは一生に一度か二度で他の涙とは全く違う。人前で流しても恥ずかしくない涙なのだ。

一般に女は涙もろい。時には涙を武器に使うこともある。し

かし、男は涙を堪えぐつと我慢する。人前で涙を流すことは男の恥だと考えているからだ。父母や愛する人が亡くなっても男は人前では泣かない。ひとり陰で号泣するのだ。

私はこれまで、人前で涙を流したことは一度もなかった。父母の死では陰でも泣かなかった。葬儀の準備で泣く暇がなかったと言えば、薄情者と言われるのだが、事実慟哭するほどの悲しみを感じなかったのだ。しかし、妻の死は悲しかった。苦労ばかりの人生だっただけに憐憫の情が突き上げ、この時ばかりは人前で泣きたい気持ちだったがぐつと我慢し、翌日、自分の部屋で思い切り泣いた。

滂沱の涙だった。あれから二十七年経っている。今でも祥月命日のたびに仏壇の前で滂沱の涙を流している。

「続・思いのままに〜我が心の雑記帳〜」(鈴木澄夫著)より



掘り炬燵のテーブルの上に、唐草模様のマグカップを二つ並べて、煎茶のティーパックを放り込み、ポットのお湯を注ぐ。手慣れた所作だった。

「味気ないが、これだと茶殻の後始末をする必要がないのですね。台所の冷蔵庫の上に、大福の買い置きがあるはずなんですが……」

立ち上がって台所に行くと、冷蔵庫の上に五個入りパックの特売品が二つ、豆大福とヨモギの餡餅だった。縁の方が健康に良さそうに見えてしまう。

「そばにあるとすぐに全部食べちゃうと、ぼくの手の届かない所に置いてあるんだ」

膝を悪くしている先生の家には、ヘルパーさんが毎日、通ってくる。血糖値の高い先生の身体を心配していることだろう。

「台所の猫の餌の入った絵皿、古伊万里ですよね」

ヨモギ餅を頬張っている先生がニヤリと笑った。着古した作務衣が瘦身に良く似合っている。

「適当な皿を使ってくれと言ったんだが、まさかあの皿を選ぶとはね」

「猫に小判、いや、古伊万里ですか」  
うまいことを言うなど先生が破顔

した。

わたしが営んでいる古本屋の顧客だった。自費出版している自分史を好んで買ってくれるありがたいお客さんだ。本を引き取ると、友人知人から贈られたこうした本が紛れ込んでいることがある。棚に陳列しても売れることはほとんどなく、扱いに困る類の本だった。

「屁理屈をこねる偏狭な人間ばかり相

# オツドアイ

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ④④

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

手にしてきたので、市井の人の話を読むとホッとするんだ」

大学では西洋哲学史を教えていたらしい。

「それにぼくは、家族運がなかったからね。家庭というものに憧れがあるんだよ」

奥さんの実家だった農家を改装して隠棲したもの、その奥さんに先立たれて今は独り暮らしだ。両膝を

悪くしてからは外出も困難になって、こうしてわたしが先生の自宅に本を届けるようになった。

「実はね、ぼくは今朝、猫に助けられたかもしれないんだ」

川岸をとぼとぼと歩いている夢を見ていたという。寒い夜で、身体の芯まで冷えて空腹だった。棧橋の前に出て、一艘の屋形船が留まっているのが見えた。

不謹慎にも笑ってしまった。一昔前に話題になった、口裂け女の都市伝説を思い出した。

「目が醒めると、猫がぼくののひらをペロペロ舐めている。あの荒れた肌の感触は、猫の舌だったんだ。猫に起こしてもらわなければ、ぼくはあのまま屋形船に乗って、三途の川を渡っていたかもしれない」

先生の目は真剣だった。強心剤を常服している先生にとって、死の影は身近な存在なのだろう。「そうそう、君に良いものをあげよう」

本に挟んでいた小さなビニール袋を取り出した。口がジッパーで開閉できるタイプで、栗替わりに使っていたのだろう。ビニール袋を電灯に翳すと、一本の白いヒゲが見えた。

「猫のヒゲは、幸運を呼ぶお守りになるらしい。とくに金運アップに効果があるそうだ」

わたしも耳にしたことがある。先生が二つ目のヨモギ餅に手を伸ばした。

「ぼくにはもう、金運は必要ないからね」

ありがたく頂戴することにした。ウエストポーチから読みかけの文庫本を取り出すと、猫のヒゲの入った



ビニール袋をページの間に大切に挟んだ。

そのヒゲの持ち主に会ったのは、先生の前を辞して、玄関の引き戸を開けたときだった。真っ白な猫が、まるでわたしが出てくるのを待っていたかのように、庭の敷石の上で前足を揃えて坐っていた。

「オッドアイ……」

左右の目の色が違うのだ。右目が黄色みの強い虹彩、左目が薄い青色を帯びた虹彩、日本では「金目銀目」と呼んで珍重してきた猫である。写

真で見たことはあるのだが、実物を見るのは初めてだった。

白猫は、ブルブルツと首を振ると、全身を使って、しなやかで大きな伸びをした。わたしに向かつて歩いてくると、頬をズボンに擦りつけるようにしてすり抜けると、そのまま廊下の奥へと姿を消した。

金目銀目の猫のヒゲは、霊験あらたかだった。それから立て続けに、ネット通販サイトに登録している高額の画集が売れたのだ。しかし、そのことを先生に報告することはできなかった。

「朝、目が醒めると、ぼくは感謝するんだ。世の中すべての生きとし生けるものに、ありがとうと感謝する。また一日、一緒に生きていることに感謝する……」

その日の朝、先生は感謝することはなかった。猫は起こしてくれなかったのだろうか。三途の川をそのまま渡ってしまった……。

庭の八重桜が満開だった。亡くなった奥さんが花を塩漬けにして、桜茶を楽しんでいたという。桜茶は見た目もきれいで、和菓子によく合うそうだ。

「桜が咲いたら、ここで花見をしま

せんか。もつともぼくは下戸だから、お茶とみたらし団子ぐらいしか出せませんが」

実現することはなかった。奥さんの甥御だという人物に頼まれて、遺品の蔵書を整理するために来ていた。

「気さくで陽気な方じゃったね」

ヘルパーの村岡さんが隣に立った。台所の片付けが一段落したのでろう。先生が亡くなっているのを見つけたのも村岡さんで、まるで微笑しているような顔で瞑っていたという。

「そういうえば、猫はどうしました?」

村岡さんが怪訝そうな顔をした。

「白い猫です。村岡さんが古伊万里の皿に餌を入れてあげていた……」

「そんなもんは見ただことでもないですよ。猫の餌も買ったこともないし。あんた、狸にでも化かされたんじゃないの?」

村岡さんが笑いながら、また台所に戻って行った。

ウエストポーチから文庫本を取り出して、栞替わりに使っているビニール袋を抜き取った。太陽に翳して見る。

(そんな馬鹿な)

何もなかった……。

## まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
  - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「夜と陽炎」

開高健 著 新潮文庫

晦渋な比喩の連続で、途中で何度も投げ出しましたが、二か月かかって読了。芥川賞受賞作家であり、ベトナム戦争では戦場ジャーナリストとして華々しく活躍、その後はシベリアやアマゾン奥地の釣行で、冒険家としても名を馳せた。その鋼鉄の鎧の内部が虚無の空洞であったことが告白されている。

思いがけずに小説家になってしまい、「くたくたにもみつぶされた歯磨きチューブ」のように何も出てこない状況で「夜から言葉をしぼりとるしかない」と深夜の街を徘徊、酒浸りの毎日。海外に出かけるのも、空洞を埋めるためか。58歳という早世も頷ける。一人称を排した異色の私小説で、日本文学大賞受賞作。



## 「無事がいちばん」

横井庄一 著 中央公論社

「不景気なんかこわくない」の副題。横井さんは日本軍の生き残り、グアム島のジャングルの中で28年間生き抜いた。洋服の仕立屋だった横井さんにサバイバルの知識があるわけもなく、すべて体験して学習するしかない。毒ガマガエルを血抜きして食べ、草木の毒性は動物が食べるかどうかで判断。いたるところにいる野ネズミやカタツムリは貴重なたんぱく源だ。



ときに動物を飼ったり（保存食の意味合いもあった）、道具を手作りしたりとささやかな楽しみを見つけて孤独に耐えた。いちばん大切なことは「無事であること」、コロナ禍で見つけた元気の出る本だ。新書サイズの古本だが、ネットではなぜか高値がついている。

## 「ニッポン大貧乏旅行記」

藤本研 著 山と溪谷社

26回目の誕生日に、若者は重いリュックを担いで、東京三軒茶屋にあるアパートを出立した。日本一周徒歩旅行の開始である。海岸沿いをぐるりと一周する。海路はフェリーを利用。貧乏旅なので、食堂は夕食の一回だけ、いちばん安い玉子丼が多くなる。他は安いパンや果物で食いつなぐ。夜は神社や駅の待合室などで野宿。



途中、体調不良で入院したり、北海道で台風に遭遇、死にかけたりと悲惨な体験をするのだが、ほとんどが歩く、食べる、寝るの毎日が淡々と綴られている。しかし、わたしにとっては豪華な海外ツアーよりも魅力的、無茶できる若さへの憧憬があるのだろうか。

# どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## どらくろ俳壇&歌壇

まん丸い太陽完成聖五月

陽のかけら一呑みしたる春の鯉

マスクして言葉少なになりにつけり

山門を額縁として八重桜

陶芸や無心になりて風光る

路地裏の雛の家の男傘

愛でる人亡くても絢爛八重桜

ほろ苦き春の野露の初物を

食<sup>は</sup>みつつ願ふ疫病去れと

近藤 昌平

竹地 恵美

富久 光

片岡 正人

隆 愚

大槇 三代子

赤川 冬人

松岡 初枝

※参加を歓迎します。

## 投稿&寄稿

「学兄昌平さんへ」 原博己

六十年近く親しくお付き合いいただき、俳句の大先輩として、いつも励まし支えてくださいました。私の土鈴づくりの切っ掛けを作ってくだ

さいました。

長く俳句から遠ざかっていた時句会へ誘ってくださいました。以来、堰を切ったように俳句に熱中しまし

た。

平成四年、俳句結社『古志』に同時入会し共に学んだ八年間、とても幸せでした。飄々として自然のまま、俳句がすべてだと言っておられた昌平さん、鋭い感性と独自の俳句スタイルは不動の厳しさをお持ちでした。

その後、俳句結社『舞』に入会、誘われて私も入会しました。『舞』の主宰からは、独自の俳句境地を高く評価されるなど、常に存在感をお示しにられました。学兄、昌平さんの俳句魂を引き継がねばと強く感じております。心からの親しみと感謝を込めて、有難うございました。沢山の良い思い出を有難うございました。

いつも励まされ、学ばされ、本当にお世話になりました。

温かくなって、お元気になられて、ご一緒に近くへ吟行に行くことなど話しておりましたのに、残念です。どうか、安らかにお休みください。

◇ ◇ ◇

近藤昌平さんと共に、どらくろ俳壇の重鎮だった竹地恵美さんが亡くなられた。四月十三日が葬儀で、知



人から連絡を受けたのは翌日で、出席していないので詳細は不明。以前、近藤さんと同年齢だと言われていたことを覚えています。

今回の句は、竹地さんが代表を務められていた「庄原市北地区俳句会」の句集からの転載、ご冥福をお祈りします。

近藤さんの句は、以前にメールで投句されていたものを選ばせていただきました。今回の猫の写真も近藤さんの作品です。

(赤川仁洋)

## 郷土の本棚⑫ (文責・赤川仁洋)

# 庄原こどもミュージカル 設立20周年

庄原こどもミュージカルの第一回

公演「ピーターパン」が上演されたのがミレニアムの2000年。当時の庄原は、こどもたちの不登校、いじめ、自殺、外国人労働者による小学生の殺害と、暗い影が山里の地を覆っていた。どうかしてこどもたちの笑顔を取り戻したい、実行委員長の子玉節氏(児玉医院院長)を先頭に、熱い想いを抱く有志たちの奮

闘が始まった。

大阪でこどもミュージカル「星の広場」を主宰する増田明氏(ボディートーク協会会長)の全面的な協力を得て、出演者を募集。練習を重ねて本番の日を迎えたが、みんな不安と緊張で押しつぶされそう。しかし、舞台は大成功、出演したこどもたちは「ええ笑顔」で輝いていた。保育所での「浦島太郎」のタコ役以来の



2000年からの全20回公演の記録を収載

舞台だった児玉氏も演技に「開眼」、毎年こどもたちとの共演を楽しみにするようになる。

庄原こどもミュージカルは、昨年の「オズの魔法使い」で20回目の節目を迎えた。順調に回を重ねたようだが、一度ピンチに陥ったことがある。各種助成金や参加者のレッスン料、入場料、寄付などで賄ってきた運営費が、助成金のカットで予算が組めなくなったのだ。13回公演で打ち切りを覚悟したが、広島カープの松田元オーナーの強力なバックアップを得て乗り切った。

本書には、庄原こどもミュージカルのそうした20年間の歩みが記録されている。公演舞台の写真はもちろん、練習風景、裏方の奮闘まで掲載されている。みんな「いい顔」だ。全員が主役、みんなで作り上げるんだという意欲に満ちている。

今年の公演は「星の王子様」の予定だったが、残念ながらコロナ禍の影響で練習のスケジュールが組めずに中止になった。来年こそは、こどもたちのほじける笑顔が見たいものである。

へ4月1日発行、非売品。どら書房で閲覧&貸出ができます。へ

## 編集後記

◇コロナ禍の影響で、今月の九日市の開催が休止になりました。日本、いや世界規模の疫厄です。仕方ないこととはいえ、寂しいですね。本誌も九日市の告示がありませんので、ページ数を減らしています。

◇近藤昌平さんの後を追うような竹地恵美さんの訃報、驚きました。寄せていただいた句から、入院されているのかなと推測はしていたのですが、……。今回の竹地さんの句は、わたしの判断で転載させていただきました。感性が瑞々しい句ですね。

◇先月号で掲載した保護犬の里親募集は、現在も継続中です。紹介や情報も歓迎、よろしく願います。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail:touzin@nifty.com  
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183  
協賛：九日市愛好会